

NEWS FILE

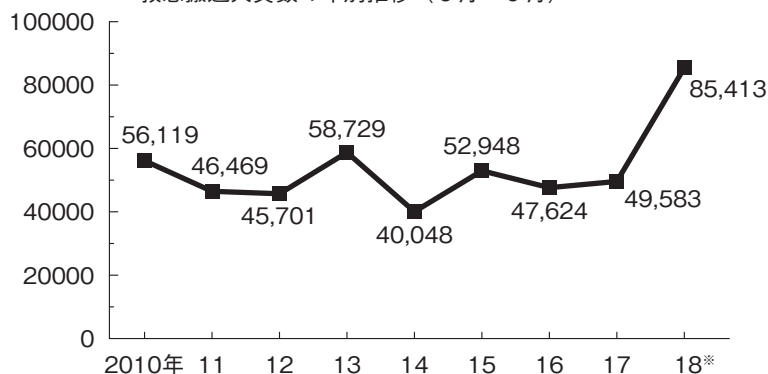
2018年の熱中症による救急搬送状況

気象庁が「異常気象」と判断した2018年夏の猛暑。「命にかかわる危険な暑さ」という言葉を毎日のように耳にした。埼玉・熊谷市では41.1度を観測し、国内の最高気温を5年ぶりに更新したほか、東京都内でも青梅市で40.8度を記録し、観測史上初めて40度を超えた。

図に示す通り、全国で6月から9月の期間に熱中

症で救急搬送された人数は、例年5万人前後で推移してきたが、2018年は8月26日まですでに8万5,413人に達し、2008年の調査開始以来過去最多となったことが、総務省消防庁の速報値からわかった。例年、熱中症による救急搬送は9月まで発生しており、2018年は今後も増えることが予想される。

救急搬送人員数の年別推移（6月～9月）



※2018年は8/26現在。

CONTENTS

- サッカーW杯を体育理論の教材に① 大塚幹太（日本体育大学）2
 W杯ロシア大会を教材として活用する2つのヒント
 サッカーW杯を体育理論の教材に② 船原勝英（共同通信）6
 ポーランド戦の日本代表のプレーから、フェアプレーを考える

サッカー W 杯を体育理論の教材に①

W 杯ロシア大会を教材として活用する2つのヒント

大塚幹太
(日本体育大学)

今回の大会においては、スポーツにおける「見る」「する」「支える」「調べる」の視点から見ると体育理論における教材に値する話題も数多くありました。本稿では、具体的な話題を使って、教材として活用するヒントを見つけてみたいと思います。

1 ポーランド戦に見る 「ラスト10分間のボール回し」の活用

ポーランド戦で起こった「ラスト10分間のボール回し」は、勧善懲悪のような単純なものではありません。選手や監督、サポーターや競技そのものなど、様々な立場からのものの見方から問われ、判断が分かれるところだと思われます。それらを議論する場合、これらの事象を自分のこととして捉え、共通の価値観のもとで行動を選択する議論をさせていくことで、議論の質に深まりが見えてくると考えられます。

そこで、「ジレンマストーリー」の手段を使ってみるのはいかがでしょうか。議論の方法はミニディベート法などが良いと考えます。ミニディベート法とは3人からなるグループを作り、肯定者、否定者、審判の3役を割り当てます。肯定者・否定者はそれぞれ論を組み立てた後、1分で主張を行う。質疑は1回のみとし、審判が根拠を明らかにしながら、判定を行うというものです。交代しながら行くと良いでしょう。

以下（教材1）に、ジレンマストーリーの例文と考え方の例を記載してみたいと思います。

この手法では、ジレンマストーリーで現象の全体像をつかませると同時に、運動やスポーツの多様なかわり方、スポーツのもつ教育的な意義や倫理的な価値をQ2で示した考え方の中に含めることによって、生徒が自然に今回の現象に対して主体的に話しやすくなると考えます。またミニディベートでも論点がズレにくくなるでしょう。

この学習は「中学校・第1単元イ、第3単元ア、イ、ウ、高等学校・第1単元ア、ウ、第3単元ア」に対応できると考えられます。

2 ワールドカップを通じた国際理解 (SNSでのメッセージの活用)

世界3大スポーツ大会（サッカーW杯・オリンピック・ラグビーW杯）のなかでも、サッカーW杯は過去の統計資料から見てみると、全世界でのテレビ視聴者数ではオリンピックの約5倍（1大会累計260億人超）、現地観客数では前回のブラジルW杯を例にとると約338万人（リオデジャネイロオリンピックは117万人）となっており、非常に大きな影響力をもっていることがわかります。実際、今回のロシア大会も試合だけでなく、サポーターの姿勢や選手の地域との交流など、W杯に関連した報道も多くあり、世界に影響を与えました。

W杯を通じた国際理解という題材については、ベルギー戦終了直後に世界各国の方々から寄せられた日本に対するメッセージを活用したいと思います。メッセージを読んで、人々は日本人選手、スタッフ、サポーターのどのようなところ（行動や姿勢）に心を動かされたのか、また日本のことをどのような国だと感じたのか、班ごとの「ブレインストーミング」の手法を用いて意見を出しながら分類し、まとまりにタイトルをつけてみるのはどうでしょうか。

この手法（教材2）では、SNSで寄せられた世界中の方々の生の意見を読み、それをもとに議論することで、スポーツには民族や国、人種や性、障害の有無、年齢や地域、風土といった違いを超え、人々を結び付ける文化的な力があることを理解しやすくなると同時に、人が良いと感じることには共通性があることが理解できると考えられます。

この学習は「中学校・第1単元イ、第3単元ア、イ、ウ、高等学校・第1単元ウ、第3単元ア、イ、ウ、エ」に対応できると考えられます。

教材 1

ジレンマストーリー・あなたならどうする

2018年6月28日、W杯決勝トーナメント進出に向けた大一番を迎え、あなたは念願のスターティングメンバーとして試合に出場することになりました。勝ちもしくは引き分けでも決勝トーナメント出場を果たします。しかし、負けてしまうともう一つの試合コロンビア対セネガル戦の結果次第ということになってしまいます。決勝トーナメント進出は日本の選手をはじめ、サポーターや支えてくれている皆さんの大きな願いです。なんとしてでも達成しなくてはと心が震えます。

試合が始まりました。日本は3試合目、疲労もあったのでしょう、先発選手を6人入れ替えてのスタートです。前半は惜しい場面もありましたが0対0の引き分けで後半に入りました。そして後半14分、ついにフリーキックから先取点を取られてしまいました。すると監督は攻撃的な選手を投入してきました。「点を取れ」そんなメッセージだと思い、自分も必死に点を取りにいきましたが、なかなか得点できません。試合も後半にさしかかり、「もう、だめかも」焦ってきたところで試合会場の大きなモニターを見てみると、日本のサポーターが写っていて日本の順位が2位になっているではありませんか。「え？コロンビアが勝ってる？」。すると82分にキャプテンが投入されました。キャプテンからは「(コロンビアが勝っているから)このままでもいい。後ろは失点しない。無駄なファールはするな。イエローカードをもらわないように。(無理に点を取りに行ったら失点やファールをするなということ)」という監督からの指示が伝えられました。試合が再開しましたが、相手のポーランドも足が止まり、無理にはボールを奪いに来ません。時間だけが経過していきます。スタンドからは大きなブーイング(不満の声)があがっています。

5分が経過したとき、自分にボールが来ました。相手選手をかわして前を向くと、味方フォワードの選手がフリーになっています。自分はパスには絶対の自信があります。今パスが通れば確実に1点がとれそうです。1点取れば確実に決勝トーナメント進出です。

■ Q1. 問題です。あなたならどうしますか。自分の行動に○をつけましょう。

- ①味方フォワードにパスをして点を取りに行く。
- ②監督の指示通り、攻めないでパスを回す。

■ Q2. 今回の行動を決めるにあたって次の考え方はどのくらい重要でしたか。()の中に順番をつけてみましょう。

- ①自分が選択した行動の結果で、自分が賞賛されたり、非難されたりする。()
- ②自分はチームの代表であり、監督からの指示は絶対に守るべきかどうか。()
- ③スポーツなどの勝負は結果が大事。負けないための選択をする。()
- ④自分やチームを支えてくれている人たちの期待を裏切るわけにはいかない。()
- ⑤スポーツマンシップとして選手は勝利を目指し、全力で戦う必要がある。()
- ⑥ワールドカップなどの大きな大会は観客だけでなく、テレビなどでも多くの人が見ている。その人たちはどのようなことを感じるか。()

■ Q3. 各班で Q1 のとるべき行動を、Q2 の考え方などを使って、自分はどのように行動を選択すればよいのか話し合ってみましょう。

教材2

ワールドカップを観た世界の人々からの 日本に対するメッセージ



もちろん掃除をした事も素晴らしいが、彼らがあんなにもガッカリするような状況に直面したにもかかわらず自分たちの信じる価値観に忠実であるということがまさに賞賛に値する。自分が最悪の状況に陥った時に彼らのように正しいと思える価値観に忠実であるだろうか、そんな風に自問自答することを余儀なくされた。



これが昨日の試合後の日本のロッカールームだ。すべてがきれいになり、そこに残されたメッセージにはロシア語で感謝の言葉が書かれていた。プロフェッショナリズムと謙虚さ、その好例だ。



行いが正しく礼儀がある。だから人々は敬意を表し好ましく思う。たとえ勝負に負けても彼らは私たちの心を、尊敬を勝ち取った。尊敬こそが成功を導くのだ。

日本の人たちに敬意を。彼らの文化は素晴らしい、称賛の声を勝ち取るに値する。尊敬の念を持つというのはまさにこういったことに対してだよ。まさに“一流”ってやつだ。日本よ、よくやった。



今回のワールドカップで日本が見せたすべてが尊敬に値する。クリーンなプレーに徹していたしファンもまたクリーンにしていた。

生まれも育ちもベルギーの人間だけど日本が敗退したことが今でも悲しいよ、あれほどサッカーに対し献身的な姿勢を見せていた国はないし、かなり良くプレーしていた。



ポーランド戦での終了まで10分間の時間稼ぎはとてもクリーンと呼べるものじゃなかったけど。

確かに素晴らしい試合だったね。ベルギーを応援していたのに気が付いたら日本を応援していたくらい。個人的に今大会でのベストマッチだった。





ダイビング（審判をだまして自チームに有利なジャッジを得ようとファウルを受けたように装うこと）も無いし、審判に盾突いて大声で喚き散らすような醜態も無い。純粹に試合に専念していた。今回のワールドカップで「これこそがサッカーだ！」と言わせた最初の試合だ。あれだけ魅せる試合をした日本が敗退する姿に本当に悲しみを覚えた。

あれ（ポーランド戦のボール回し）は気持ちのいいものじゃなかったのは間違いない。



まさに粉骨砕身、全ての選手が力の限りを尽くして戦う素晴らしい試合だったね。

失意の底にありながらもこのような立ち居振る舞いができるのは彼らに品位、礼儀正しさ、謙虚さ、そして感謝の気持ちが真にあるからだ。



日本はレフリーについて文句を言わないそれに、後片付けをして礼儀正しく去る。

確かに日本はこの上なく良いサッカーをして今大会の中でも一番下馬評を覆したチームだった。ベルギーを苦しませていたね！



模範的行動をした日本のファンは表彰されるべきだ。俺がすぐに訪日する理由がまた増えたよ。

日本、ありがとう。ベルギーのファンとして、ベルギーと日本の対戦を本当に楽しんだよ。俺ら赤い悪魔と大会屈指の試合を繰り広げてくれて感謝している。次のW杯で日本のサッカーを見るのが待ちきれないな。



日本の礼儀正しさと教養が備わっている行動、日本はワールドカップで優勝しなかったかもしれないが、世界中にいる何百万というサッカーファンの心を掴んだ。日本は尊敬に値するよ。

以上のメッセージを読んで、サッカーの試合やチームを支えているスタッフやサポーターの行動や姿勢が放映・報道されたり、現地で直接触れ合っていく中で人々は日本人選手、スタッフ、サポーターのどのようなところ（行動や姿勢）に心を動かされたのか、また、日本のことをどのような国だと感じたのか話してみよう。そして出された意見をまとめ、まとまりのタイトルをつけてみよう。

サッカー W 杯を体育理論の教材に②

ポーランド戦の日本代表のプレーから、フェアプレーを考える

船原勝英
(共同通信)

1 | 賛否両論

世界中が熱狂したサッカーの W 杯ロシア大会で、日本代表は予想を上回る健闘で多くの賞賛を受けましたが、同時に厳しい非難を浴びることにもなりました。グループリーグ (GL) H 組の対ポーランド戦終盤、0-1 でリードされた場面で攻撃せず「時間稼ぎ」のパス回しに終始し、激しいブーイングを受けたことはご承知の通りです。西野監督の采配を「批判を覚悟の上で下した勇気ある決断」と評価する声があった一方で、「スポーツマンシップに反する」との非難も沸き上がった。子どもたちへの悪影響を懸念する指摘も目立ちました。賛否両論が渦巻いた日本代表の選択は、保健体育教師やスポーツ指導者にとっても格好のテーマになるでしょう。

2 | フェアプレーとはほど遠い？

日本戦と平行して他会場で行われていたコロンビア-セネガル戦は、コロンビアが後半に 1-0 とリードする展開。両会場の試合がこのまま終了すれば、決勝トーナメントへの順位決定の仕組みからコロンビアが 1 位で、日本がセネガルと同勝ち点ながら警告数などの「フェアプレーポイント」の差で 2 位通過する状況が生まれていました。

後半 37 分に交代出場した長谷部主将が身振りも交えてイレブンへ「警告を受けないように」とのベンチの指示を伝えました。国際サッカー連盟ランキング 8 位の強豪ポーランドはここまで 2 連敗で、すでに GL 敗退が決まっていました。1 勝もせずに母国へ帰るわけにいかない。リードしたまま試合を終わらせたいポーランドは猛暑の中で足が止まり始めており、「願ってもない」日本の戦法に応じてボールを奪いにいく気配がなくなりました。パスが途切れなため選手交代できず、相手監督がたまたまピッチ内の選手に指示して 1 人が倒れ込み、ようやく交代が完了するコントのような場面までありました。

試合終了後、日本に対して世界中から批判が浴びられました。英国のガーディアン紙は「最もスポーツ

マンシップに反したひどい試合だった」と酷評。フランスのメディアは「会場のごみ拾いをする日本サポーターに好感を持っていたのに、大きなイメージダウンだ」と厳しい論調でした。

国内でも「がっかりした。日本は自陣に引きこもり、ポーランドもボールを奪いに来ない。談合のようで失望した」といった批判が沸き上がりました。少年サッカーの指導者からも「フェアプレーとはほど遠い試合。子どもたちには見せられない」といった声が上がリ、スポーツの研究者からも「子どもたちも注目している試合だったので、最後まで正々堂々と戦う姿勢を見せてほしかった。勝ち上がることは大事なことだが、勝つためなら何をしてもいいというようなメッセージにならないよう、プロ選手も意識すべきだ」(早大の友添秀則教授=スポーツ倫理学)との指摘がありました。

3 | 「手抜き」という批判は正しいか？

では、この日本のプレーは何が問題だったのか。第一に、どんな場合でも全力を尽くすというスポーツの目指すべき姿から外れている点でしょうか。国際サッカー連盟 (FIFA) の「フットボール行動規範」では、最初に「1 勝つためにプレーする 勝利はあらゆる試合のプレーする目的です。負けを目指してはいけません。もしも勝つためにプレーしないのならば、あなたは相手をだまし、見ている人を欺き、そして自分自身にうそをついています。強い相手にあきらめず、弱い相手に手加減してはなりません。全力を出さないことは、相手への侮辱です。試合終了の笛が鳴るまで、勝つためにプレーしなさい」と定めています。

しかし、この場面を客観的に眺めれば、あくまで GL 最終戦であることが重要です。GL 勝ち上がりの条件は①勝ち点、②得失点差、③当該国土の勝敗——がものをいいますが、それでも同条件の場合は「フェアプレーポイント」の差で当落が決まります。「フェアプレーポイント」はこの大会で初めて採用された新たな規約で、この時点でイエローカード (警告) の累積が 6 枚だったセネガルに対して、累積が 4 枚だった日本が勝ち上がる状況でした。日本はこれま

で「負けても決勝トーナメント進出」というアドバンテージを持ったことがなかった。1つ上のランクになったから受けた批判だったのです。

「全力を尽くさなかった」との批判ですが、GL最終戦ではすでに勝ち残りを決めている有力国は、主力選手をごっそり外して控え選手にプレーさせています。G組のイングランドーベルギーは、1位通過すると準々決勝で優勝候補のブラジルと対戦することになるため、どちらも勝利を目指す真剣なプレーとはいえない内容でした。「空気を読まなかった」ベルギーの控え選手のゴールでイングランドは負けて首尾よく2位通過し、目論見通りベスト4にまで勝ち上がりました。C組のフランスーデンマークも、そのまま1、2位通過を狙って「手抜きプレー」に終始し、大会唯一のスコアレスドローでした。

このような「手抜き」は他競技の陸上競技などではしばしば見られます。引退した男子短距離のウサイン・ボルト（ジャマイカ）などは予選、準決勝レース後半でスピードを緩め、悠々とフィニッシュしていました。通過が確実な場合、次ラウンドに余力を残すための当然のレース戦術とされます。決勝で最高のパフォーマンスを発揮するための策が批判されることはありません。ハンドボールでは攻撃が消極的な場合は「ストーリング」の反則になり、バスケットボールでも時間内（24秒ルール）にシュートしないと相手ボールになります。サッカーにはこの規則がなく、時間稼ぎはある種、容認されているともいえます。

4 「他力本願」か、英断か？

第二は、日本の作戦が他会場の結果に左右される「他力本願」だったことです。セネガルが同点に追い付けば、セネガルが優位に立つ場面。残り15分あまりで得点のチャンスはあり、そうなれば日本の作戦は裏目に出る。ライバルチームの結果に自らの運命をゆだねる難しい選択には違いありません。

では、日本が自力で同点、あるいは勝ち越し点を挙げることが可能だったのでしょうか。この日は連戦の疲労が濃い主力を外して控えの7選手を起用しましたが、攻撃は機能せずゴールが遠かった。攻めに出て逆に致命的な2点目を失う恐れもありました。もう一方の会場ではコロンビアが明らかに優勢でした。もともと守備が堅く、1位通過を目指すコロンビアがそのまま逃げ切る公算が大きい。現地に送り込まれていた日本のスタッフからの情報も判断材料になったでしょう。わずかのミスから1点が生まれるのはサッカーでは普通のことですが、日本がポーランドに追い付くよりも、コロンビア勝利の可能性が高い。このまま0-1の敗戦を受け入れ、結果が裏目に出た場合のリスクも見込んだ上での決断だったことは明らかです。

戦った選手、監督、コーチたちはどう受け止めていたのでしょうか。試合後の長谷部主将は「見ている方にはもどかしいゲームになったが、これが勝負の世界」と少し苦笑いを浮かべながらインタビューに答えました。西野監督は試合後のミーティングで、攻撃をさせず「ブーイングを浴びせられながらプレーさせた



ポーランド戦の終了間際、時間稼ぎでパスを回す日本代表（写真：共同通信社）

こと」を選手とスタッフ全員に謝罪しました。それに対し、選手から「それを監督にさせたのは自分たちがふがいなかったから」という声上がり、全員が「次のベルギー戦で見返してやろう」という強い気持ちでひとつになったといいます。

1993年のW杯アジア最終予選「ドーハの悲劇」。勝てばW杯初出場が決まる残り時間わずかのところで、ベンチのオフト監督からの指示が伝わりきらず、日本は同点ゴールを許してしまった。当時の日本のサッカーには、時間をうまく使って試合を終わらせるという発想がなかったのです。あれから四半世紀。筆者は、負けても勝ち上がれるという状況で日本代表が落ち着いてこれを受け入れ、大会直前に就任した日本人監督とともに目指すステージへ進んだことを評価します。

強豪ブラジルを倒して「マイアミの奇跡」とたたえられた1996年アトランタ五輪の西野監督ですが、この時の日本はGLで2勝しながら得失点差で敗退しています。勝ち残ることこそがGLの最大のテーマであることを誰よりも知るのが西野監督だった。加えて、選手たちは欧州でリーグ降格やチャンピオンズリーグでの勝ち残りの厳しさを日々、骨身に味わってきています。ベンチからの指示を受け入れ、一丸となって試合を締めくくることができたのは、キャリアのなせるワザだったのでしょうか。

5 | 中学生に何を伝えるか？

「サッカーは少年を大人にし、大人を紳士にするスポーツだ」とは、1968年メキシコ五輪で日本を銅メダルに導いた日本サッカーの父、故デットマール・クラマーさんの言葉です。一方で、サッカー界には「マリーシア」という概念があります。反則ではないが「狡猾に」有利なポジション取りや時間稼ぎをすることで、サッカーではむしろ「賢いプレー」とされます。「最後まで全力を尽くして戦う」ことが唯一最大のテーマになっている日本のスポーツ界にはなじみにくい概念ですが、国際舞台では当然のこととされています。

では、日本のサッカーはこれまで国際舞台でどんな

プレーをしてきたのでしょうか。2011年の女子W杯では「なでしこジャパン」が優勝と同時にフェアプレー賞を獲得。古くは銅メダルのメキシコ五輪男子チームもフェアプレー賞を受けていますし、各種国際大会では日本勢は同賞の常連になっています。ロシア大会でもGLでの反則数は出場32チームで最少の28。2位はブラジル、スペイン、ドイツの29でした。反則なしでも勝てる強豪国以上にクリーンな戦いをしたのです。世界でずっとフェアプレーを心掛けてきたことが、今回の勝ち上がりの背景にあったことは記憶にとどめておくべきです。

決勝トーナメントの対ベルギー戦で見た日本の戦いぶりは世界から賞賛を受け、高まっていた批判は潮を引いたように消え去りました。もちろん、消極的なパス回しをした事実は消えませんが、この舞台で戦う力のあるチームであることを世界に認めさせたわけです。ポーランド戦残り10分ほどのプレーだけでなく、日本の振る舞いはW杯すべてのプレーを通じて判断されるべきだったのではないかと。

少年サッカーの指導者たちに伝えたい。世界中でさまざまな価値観に従ってプレーされているサッカーには、日本人には馴染めない様々な側面がある。戦いのステージにも段階があり、国際レベルの大会ではこういう選択肢があることを。子どもたちには、自分たちが目指すべきプレースタイルとは違うサッカーがあることを、ある段階で理解させることが必要なのです。

ドナルド・トランプが米国大統領になり、金正恩のような独裁者と世界の運命について会談するような時代です。望ましい理念とはかけ離れた現実が進行する時でも、現実から目を背けるわけにはいかない。高級官僚が平気で嘘をつき、セクハラをしても大臣や首相が知らん顔をしている。そんな姿を子どもたちはしっかりと見ています。現実社会はそうであっても、自分たちは大切にしている理念を掲げて違う生き方を選択する。そういう子どもたちに育てるには、スポーツ指導者は世界がどんな仕組みで動いているのか、正面から受け止めて伝えるべきではないか。ポーランド戦の日本代表のプレーには、そういったヒントが満載でした。

中学保健体育科ニュース 2018年 No.3 (通算29号)
2018年9月15日発行

●編集 大修館書店編集部
●発行所 株式会社 大修館書店
〒113-8541 東京都文京区湯島2-1-1
TEL 03-3868-2298 (編集部) / FAX 03-3868-2645
[出版情報] <https://www.taishukan.co.jp>
●印刷・製本 広研印刷株式会社